
エデンの園 * 踊れその果てで

瀬田一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エデンの園* 踊れその果てで

【Nコード】

N4551Q

【作者名】

瀬田一郎

【あらすじ】

河野る宇様とのコラボ作品でございます。野イチゴで掲載予定だったのですが、諸事情によりこちらに書かせていただくようになりました。世界は近未来。政府が開発を放棄した飛行場の一つを買い取った一部の酔狂な金持ちがクローン施設を作った。政府からは黙認されている。その中でクローンを殺すショーを行っている兄弟がいた。

双竜と呼ばれた兄弟（前書き）

コラボ作品です。同一の世界観で違う著者が書き進めていきます。随時、コラボしたいですとの募集はしております。詳しいことを知りたい方はメッセージをください。尚、返信は遅れる場合がございます。

双竜と呼ばれた兄弟

どうしようもないくらいにみじめな男がいたのなら何も考えずに殺しを続けたのだろが、そう思いながら空は立ち上がる。短い階段の中央。壊れた柱を背中に預けてぼんやりと屍を見降ろしていた。

「なあ一体いつになれば終わるんだ？」

空は言った。

「後少し」

大地は黒ずんだ血の池に横たわるクローンの衣服を探っている。

「ずっとそればかりだな」

空はデニムの後ろポケットに両手をつっこんで階段を降りる。親指以外の四本の指を隠す黒色のハンドカバー。指先で葉莖を転がす。「具体的な話は辞めておこつ。焦るとロクなことにはならないからな。特に空は」

大地が何かを握って電子端末に照合をかけた。照合とは合っていたが、目当てのクローンでは無かったようだ。大地はPコートポケットを一つ外して内ポケットに電子端末を入れた。

「ひでえ言われようだな」

空が返す。

「どこいくんだ？」

空が欠伸をしながらふらふらと歩く背中に言った。空は後ろで手を振って散歩だよ、と答えた。大地は空とは別の方向へ歩く。宿舎がある方向だった。

散歩

空は真つ黒のダウンを着ていた。胸もとにターゲットマークが入った挑発的なデザイン。中にはタンクトップがあつて白い素肌を見せるように肌蹴させていた。女の悲鳴が上がったのは空がサングラスを選んでいる時だった。店先にある安いサングラスを取ってそれをかける。主人は代金を受け取らなかつたので主人の手を掴んで直接掌の上に置いた。震える手でしっかりと代金を握った。

この街はどこかの都市を模して作られた街だそうだ。エリア圏を囲む灰色の壁があるくらいしか変わらない。クローンは仕事を与えられる。その街に住む誰かの役を演じる仕事だ。

運河を渡る船が足元を滑っていく煉瓦の橋に空は立っていた。

前方から女がやってくる。誰かに追われている。

「待てよ」

空の脇を抜けようとした女の手を掴んだ。女は離してください、と抵抗する。女の両腕首を掴んでひとまとまりに固めた。空は片手で女を吊るした。顔を背けて悲しげな表情に空は興奮してくる。

「おい！あんちゃんよ。そいつは俺の獲物だぜ」

アーミーナイフを持った男が言った。太った男。カーキ色のワークパンツとミリタリージャケットが悲鳴を上げちまっている。醜さを絵に描いたような男だった。印象は悪人決定だな。

「それは悪党が言う台詞だと思うが？どうだい？」

空は女を見て言った。微笑みかけてみたが、女は見向きもしなかつた。空の足を蹴って逃げようとする姿がまたそその。思いつきり容赦のない蹴りで濡れて熱っぽい顔がセックスのしている姿を思わせる。太い唇がまた欲情させる。

「聞いているんだよ！あんたに」

吊るした女を揺さぶった。女は唇を噛んで耐えている。もだえる姿に更なる興奮が胸にこみ上げてくる。殴ってやったらどんな声で

泣くんだか、想像していると男が邪魔をしてくる。

「なんだよ。いいとこなんだ。邪魔すんじゃねえよバーカ」

空はホルダーからハンドガンを抜いた反動で男を撃った。

男の醜い悲鳴が芝生が敷き詰められたベンチにまで聞こえたようだ。カップルがいたが、退散していく背中が見えた。撃ち抜いた場所は足。ふとももの付け根だった。股間を撃つてもいいが、それは情けをかけてやろう。死ぬ時には男でありたいからな。命乞いをするのならば女として死を与えてやろうと思った。照準を股間に合わせる。

「殺せ。やるならすぐに殺せ。そうでない俺は立ち上がり、お前の首根っこを切り落としてやる」

男は立ち上がるうとする。

照準をあげて額と胸を撃った。嫌いな奴ではないよ。怨むのなら弱者だった自分を怨むんだな。そうすれば少しは諦めがつくってものだ。祈りかい？して欲しいのか？そんなに頼むなよ。男はドサツと前のめりに倒れた頭に罵声を浴びせた。

続く言葉であるほどに幼稚で意味のないものとなっていくた。

カメラ

女は手を離すと走って逃げた。

男が持っていたアーミーナイフを拾い上げて、女の背中に投げる。当たったのは路地にあつたパイプ管だつた。中から蒸気が出てくる。女が消えた路地を追いかける。路地はゴミ箱とパイプ管の迷路で出ている。人が歩くような場所じゃなかつた。

案の定、進む道が無くなって女は立ち止まっていた。

「礼も云わずに去るってどうなんだと思わないかい？」

空は女に言った。

女は振り返り、警戒する目を向けてくる。

「安心してくれ。殺したりはしない」

空は両手をあげて言った。

「それにカメラがないだろう？ここは」

上を見るようにうながす。クローンを殺す条件の一つにカメラの前で殺さないとポイントがもらえないと来ている。ポイントつてのは数十ポイントあれば願いが何でも叶えてくれるっていう素敵なシステムだ。どうだ？量販店でも導入してみるか？すごい噂にはなるだろう。

大地は沖縄に新しい戸籍と家を建てることを願いたいって言うていたが、空には不要なものだつた。新しい戸籍が得たところで罪人は浮いてしまうのさ。居場所なんて何処にもないならここでクローンを殺し続けるのも悪くないかなって思っている。

「カメラ？」

「あーカメラね・・・カメラつてのはお前らを監視するじゃないな・・・そう神様つてやつが見ていないと駄目な決まりがあるんだ。生死を決めるのは神様つて習つただろ？」

デタラメな宗教が必須課目にあるらしく、カメラとクローンを狩る人間は神のなんとやらつて言われている。悪趣味な神様だ。

「そう・・・ありがとう」

女が笑うとすごく可愛く思えた。これが「雪」との最初の出会い。この時は何も思わなかったが、今考えるとこの時に恋に落ちたんだと思う。それがわかった時にはさよならしか言える言葉を持っていなかった。今、ここにかえれるとすれば何を話しただろうか。

やっぱり何も言えなかっただろうか。

宿舎

「遅かったな」

大地がサラダばかりのヘルシーメニューを食べながら言った。

「ウサギじゃないんだぜ。俺らは人間様よ」

空はとなりに座った。

肉にデザートにオムライス。パスタも悩んだが、辞めておいた。

「それで次の通信はいつだっけ？」

「今日だ」

大地はそう返した。

「ふうん。ポイントは？」

「まだだ。数十ポイント足りない」

「一気に稼いだらどうだい？」

肉を口に流し込む空。

「危険がある。小さく獲物を追いつめていこう」

ポイントが多くもらえるターゲットは大概は複数から狙われてい

る。それゆえに同じ標的をめくりハンター同士の殺し合いも少なく

ない。

それを危惧している大地。

「つまらない生き方だとは思わないか？」

空はオムライスにケチャップで絵を書いた。

ハート型の中にクジラを浮かばせる。

「思わないな。何かあるのかを考えて行動するのが生き残る最善の方法だと思っている」

「慎重ね。でも生き残ってどうするつもりなんだ？」

「沖繩に永住するつもりだ」

「地味な夢ね」

空はバカにしたように言っていてオムライスにがつついた。

「ふう。まあ次の通信が来たら教えてくれよ」

そう言って宿舎を後にした。

宿舎にまであるカメラが彼らの動きを追っている。カメラの奥にはこの世界に君臨する神々がいた。それぞれに愛するクローンを囲んでいる。

まるでお気に入りの人形を集めるようにクローンを自分の部屋で住まわせている。

そこにいるのは高級なクローンだった。

安いクローンは風俗街へ流されることが多い。

遺伝子売るアイドルや女優も少なくない。

それが最高級の値段がついて目が飛び出るような値段で落札されていくものだからこの世界は狂っているよな。

街にいるクローンも劣勢遺伝子を持つクローンだ。

つまり不良品ってことさ。

そういうクローンは人殺しショーに使われている。

ジョークにしては行きすぎてているが、それを取り締まる側の人間が開いている場だった。

「あの兄弟ではどうだ？」

戸塚が言った。

股間を外国人の男の子に啜えさせている。

「そうですね。悪くない人選かもしれせん」

筒井が答える。

「だとしたら次のショーは決まりだな」

「兄弟の殺し合いですか？いいですね」

筒井は薄気味悪く笑ったのであった。

夢

「こうなるとは思っていたんだが」

大地は頭を抱える。

「兄弟の殺し合いをすれば沖縄に住めて新しい戸籍ももらえる。大地。頼むよ」

空は手を広げて近づいてくる。

大地にしっかりと銃を握らせて胸を撃つように言った。

「雪ッていう名前なんだ。早乙女雪。大地の妹にしてやってくれ」
空の後ろには雪と呼ばれた女がいる。

「駄目だ。二人とも生きて沖縄に永住する」

「撃つてくれ。この区画が指定された制限区域になる。雪が風俗に売られちまう前に戸籍が必要なんだ。ポイントは俺を撃てばすぐにもらえる」

「駄目だ！それなら俺を撃て」

大地は銃を一回転させて空に撃つように言った。

「出来るわけねえだろ？」

空は涙を浮かべる。

「たった一人のアニキなんだぜ？」

空はそう言つて大地に銃を握らせる。

大地は銃を捨てた。

「いいか？お前はたった一人の弟なんだ。俺も殺せやしないよ」

空を抱きしめようとした大地の腹にスタンガンをぶち込んだ。

薄れる意識の中でごめんな、と空が言った口元が見えた。

身体が震えるが、意識はあった。

「さよなら」

空は自分でトリガーを引いた。

乾いた銃声なんか夢に思えるくらいの青天が空にはあった。

賭け

その兄弟の姿を見て戸塚は新たなる賭けをする。

「どうだ？あの兄が数日の内にポイントを消化するかを賭けるか？」
筒井はうなずいた。

「私は使わないに賭けましょう」
同じく使わないに賭ける男が大勢いた。兄弟の姿に退屈だと言つて席を立つものもいた。

「決まりだな」

「賭けを成立させ運営局に報告する。
四日以内にポイントを使うか否か。
今日は三日目だった。」

「なああんたが兄弟殺しだろ？」

ツバサが声をかけてくる。

サラダを頼張る大地。

「なんかいえよ」

大地はツバサの背後で腕をかためる。銃を突きつけて警告した。

「次はないと思え」

大地はそう言つて宿舎を後にする。

向かった場所は墓石だった。

早乙女空の墓。

後を追つて自殺した雪と同じ墓にしてやった。

綺麗な墓は無理だった。

その辺に落ちている木材を十字架に張り付けて墓を作った。

「ポイントなんてもういらねえよ」

大地はそう言つて空の墓を壊したのであった。

四日目

業を煮やした戸塚が仕掛けてくる。

大量のハンターに追われる大地。

一発の銃弾が大地の胸を貫いた。

「よっしゃ」

一人のハンターが戸塚に連絡を入れる。

報酬が振り込まれたことを確認するとハンターは去っていった。

「ポイントを使うかい？大地くん」

戸塚の声が聞こえる。

シヨウウィンドウの中にあるテレビの中だ。

「くだらねえな」

「なんだって？」

「くだらねえよ。本当に何をしてやりたいのかわかんねえ」

大地はそう吐き捨てた。

「死ぬぞ。死んでしまっぞ」

戸塚は焦っていた。

死んだ場合、賭けは不成立となり立案者の負けになる。その負けが来るとかなりの額をもっていかれてしまう。

「ポイントを使って欲しいのか？そこまでして」

「早く願いを言え」

「くだらない、と大地は思った。

「くだらない殺し合い

「くだらない欲望

「くだらない痛みに

「くだらない怒鳴り声

「くだらないことだらけで

「くだらない願いを求める

「だったら願いを叶えてやるよ」

大地は諦め口調で言った。

そ、そそ、それはと戸塚が先を言うようにせがんだ。
キャンディを持ったじじいを待つ子供みたいに。

「ポイントを使って空と雪の遺伝子を持つ子供を作ってくれ。二人を兄弟にして里親に出してくれ」

大地は瞼が重くなってくるのを感じる。

「うんと幸福な家にしてくれよ」

バカがつくくらいによ、と大地は笑った。

空は青く、今年最初の雪が降ったのであった。

沖縄空港

「赤ん坊ですか？」

戸塚の部下がクローンのひと組に二人の子供を渡す。

「これが空、こっちが雪。戸籍と仕事先はこれだ」

部下は戸惑うクローンにお金と戸籍謄本を渡す。

「死にたくなかったらこの二人を幸せにすることだな」

部下はそう言って去った。

空港に残された二人は互いに顔を見合せながら飛行機に乗った。

「なんだったんだろうか？」

離陸する飛行機の中で親父が言う。

「さあ？でもこれですつと一緒にいられるでしょう？良かったじゃない。それにこの子可愛いわね」

母親が雪の頬を撫でる。

雪は母親の指を小さな手で握った。

「もしいつか私達の子供が出来たらつぼみって名前にしませんか？」

「どうして？」

「空と雪でしよう？だったらいつか花が咲くようにつぼみって名前がいいと思うのよ」

母親はそう言ってほほ笑んだ。

二人を乗せた飛行機が沖縄へ向かったのであった。

沖縄空港（後書き）

この母親と父親はクローン牧場で家族ごっこをしていました。その子供を殺したのは空です。そのことを知らずに愛そうとする母と父。次第に似てくる空に恐怖を覚える家族。未来は不幸な結末を迎えます。

人を愛することは怨むより難しい。

人を愛することは憎むことより難しい。

だが、愛することは何よりも美しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4551q/>

エデンの園*踊れその果てで

2011年2月5日12時05分発行